

教科書を活用したプリント学習

岐阜県立斐太農林高等学校 谷 常夫

1. はじめに

30年余教員を続けていまだに悩むことは教えることの難しさである。せめてわかりやすい、学習しやすい授業になるようにと心がけているが、その拙い工夫を述べることにしたい。

2. 私のプリント学習

現任校に来てから上記のような思いもあって、ひと味工夫を凝らしたプリント学習を始めた。右下を見ていただければおわかりのように、私のプリントはすべて質問形式になっている。この形式は以前勤務していた通信制高校でのレポートをヒントに考え出したものである。

生徒にとってわかりやすい授業とはどのような授業であろうか。私はどのようなことを学ぶのかははっきりと生徒にわかる授業ではないかと思っている。通信制のレポートでは、生徒は自力で教科書等を読んで学習しなければならないので、学習すべきことがわかりやすく質問されていなければならない。先日小学校の授業を参観する機会があったが、今日の授業で学習する課題が何であるかを子どもたちにしっかりと提示（黒板の一番上に赤線で囲んで書かれていた）して展開されていた。「ああこれなんだ」と思いを強くしたしだいである。

このようなプリントによってどのような成果が得られたであろうか。第一は、授業の後でこのプリントを見た時、授業でやったことがよくわかるであろうということである（はじめにで述べた学習しやすさ）。一般的な板書では伝授すべき知識

の要点だけしか書かないので、そのノートを見て後でも何を学習したのかはわかりづらい。とくに授業をしっかりと聞いていなかった生徒（休んでいた生徒も）はそうであろう。知識の要点よりもむしろ重要なのは「それはどのようなこと?」、「なぜそうなの?」、「そういうことを何というの?」という知識の意味である。教師は授業ではそのことを説明してはいるが、残念ながら生徒の頭の中にはなかなか定着していかない。私のプリントでは知識の意味は質問で、知識の要点はその答でわかるようになっているのである。また、後で見るとテスト前だけであろうが、生徒は授業中よりもテスト前の方がよく勉強するはずである。

地理-27 なぜ飢餓と飽食が存在しているのか

組名 _____ 氏名 _____

1. 現在の世界人口は約60億人、世界の年間穀物生産量は約18億トンである。

(a) 平等に分配すると「1人あたりの穀物量」はどれだけか。
()

(b) この数値は何国の「1人あたりの穀物消費量」と同じか。
()

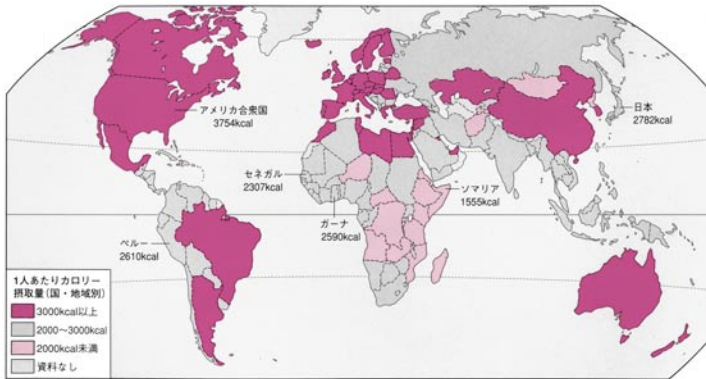
(c) (b)からどのようなことが言えるか。
()

(d) 実際にはどうなっているのか、教p134の地図①を見て「Question」に答えなさい。
*「1人・1日あたりのカロリー摂取量」が3000キロカロリーをこえている国はどこか。
()
*「1人・1日あたりのカロリー摂取量」が2000キロカロリーを下まわっている国はどこか。
()

(e) このような不平等によってどのような問題が起きているか。
*3000kcalをこえる国=()
*2000kcalを下回る国=()

(f) 世界で最も豊かなアメリカ人の穀物消費量(1年間の平均)は()以上であるが、ナイジェリア人はたった()である。
*ナイジェリア人は70kgの穀物をどのように消費しているか。
()
*アメリカ人は800kgの穀物をどのように消費しているか。
()

第二は、私が生徒にどのようなことを教えた
 いか、どのようなことを生徒に学んでほしいの
 か、を明確にできたということである。実際
 に作成してみると、どのような質問にするの
 がたいへん難しく、私自身の問題意識を
 鋭くすることが求められたわけである。



▲①1人・1日あたりのカロリー摂取量 (1999年) (1999 FAO食糧年報表)

Question

- 1人1日あたりカロリー摂取量が3000キロカロリーをこえている国はどこだろうか。
- 1人1日あたりカロリー摂取量が2000キロカロリーを下まわっている国はどこだろうか。

帝国書院版「高校生の地理A」p.134

3. 使える教科書の選択

地理の授業において重要な役割を果たすのは資料であるが、ほしい資料が教科書に載っていればたいへん楽である。従来の教科書では量も少なく、使用しにくくもあったが、新教育課程で教科書のスタイルが大きく変えられたので、この際できるだけ活用できる教科書を選んでみようとしてじっくり比較してみた。選んだのは帝国の「高校生の地理A～くらし・世界・未来～ 最新版」であるが、使える資料が多く、斬新な編集の今までにない教科書である。従来あまり教科書を使わなかったが、今はプリント作成に活用している。

4. どのように教科書を活用しているか

第3章「宇宙船地球号にのって～地球的課題～」の4節「食料問題」に焦点をあてて述べる。人口増加の問題は増加そのものが問題なのではない。

問題なのは食料分配が不平等なこと、つまり飢餓と飽食である。まず、世界の年間穀物生産量18億tを世界の人口60億人で割った値が、日本の1人あたりの穀物消費量と一致することの意味を考えさせる(前頁のプリント27、1(a)(b)(c))。平等に分配すれば世界のすべての人々が日本人並みの食事をするができるわけである。次に教科書の「1人・1日あたりのカロリー摂取量」の統計地図(左図)を使って、「Question」に答えさせ

(同(d))、現実には飢餓国と飽食国が存在することを理解させる(同(e))。この不平等はカロリー摂取量よりも食事内容においてより顕著である。ナイジェリア人の年間穀物消費量は70kgであるが、アメリカ人は800kg以上である。アメリカ人はこんなに多量の穀物をどのようにして消費しているのか(同(f))、そのことを教科書の資料(下図)を使って理解させることができる。(各国の穀物消費量は大東文化大学中本博皓氏の日本消費経済学会関東部会報告「消費の不平等」1999から引用した。)

このあと扱う、飢餓国はなぜ食料増産ができないのか、食料援助の問題点、日本人の飽食問題についても教科書の資料を活用することができる。



帝国書院版「高校生の地理A」p.138